

六編下

13  
2909  
21



門へ13  
號 2909  
卷 21

明後傳 寢覺見線言卷之三

東武 南仙笑楚滿人編次

第五回

依一仇浪定りたる浮川竹の縁まよも寒との字  
の有まがとそ人の機や世の美理も捨て侶共先知  
三途浮名を原す風流士もまろあろま六摺女とて  
只一向に滅うと。いつて是とわくとめんや。既に彼の  
三世の浦早と波入し。



昭和九年  
七月二日  
購取

素性の爰に説ありされねど。その志操優よき  
く赤くも守ると金銭のく。さうも曲を  
直さず。かろ情深き性まぶ。おのれは逢人と  
ひー女と男の騙らんとせんとせしと  
あめて海公和らげ。浦里の女中さし耻らるら  
し。かろのち逢ひてさしとさしと浦  
里の流まの身は美の賤からぬ。あ  
さん。さうは用らるのまでもさうのさうと

あつて顔をおげ。せんらあまか。尊い。浦里  
浦里とていふ。成程目。女の私で  
さ入物。さなる程。やの男子の身。家とす  
志通のま。無理。女子冥利。さ方と一夜。野の  
あやうて。夫の氣。入らふ。あやう。女子の  
はら。指子。ま。は。尊い。尋ねて。着

かぞも情は今宵一夜客を思ひて。浦里の女房  
と寝まじく私に逢ふ。お主人と暮らして  
思ひどがぞ晴らさして下さるませ下は思ひの  
浦里おまじゆ。お主人の私とすまじ程の思ひ  
おんえんと。お主人を尋ねておんえんと  
私があまのうらなに思ふの事も有難い  
おんえんとお主人の許す程は思ひの  
おんえんとお主人の許す程は思ひの

思ひておんえんと。浦松えぬと産後へお連  
ゆくとおんえんと。浦松「アイのちをいれし  
女房」ハイおんえんとお世話をなすうら  
おんえんとお主人の許す程は思ひの  
おんえんとお主人の許す程は思ひの  
おんえんとお主人の許す程は思ひの

ふくをのせえい。りぬわち朱刺あひし。うらうらうら。  
まごそめたるのむらぢぎえすめ入何の深いよふ。ずがあえ  
えし何ぞとこく。よの夏があつて。匹あえし。  
のであらせう。あまらとこくが部屋維も外は。使人も。  
肉澄たる。とあえし。とも大夏がぢぎえせん。種。ごう  
どす。うらうら。あまらとこく。りつと。うらうら。も氣よか。ら  
りす。女房。イモウ思ひ肉。あまら。びろ外。あ。ら。うらうら。うら。  
成程。とこく。が。今宵。あまら。は。逢。し。と。や。し。深。い。沢。の

有夏とのつて何れも業。うらうら。す。夏。で。うらうら。うら。  
あ入。て。相。後。せ。な。ら。う。ぬ。夏。が。あ。る。ゆ。ゑ。は。肉。外。の。者。  
も。深。く。か。く。供。も。連。ぶ。く。獨。り。終。は。ま。さ。し。す。  
う。は。廓。へ。こ。ぎ。う。ら。う。ら。う。ら。う。ら。う。ら。う。ら。う。ら。う。ら。  
こ。ま。い。何。と。あ。う。く。ー。や。ま。せ。よ。私。々。ア。春。口。屋。時。を。助。が  
女房。光。と。や。の。ト。あ。く。あ。く。浦。里。が。エ。と。と。え。ら。  
あ。う。ら。う。ら。う。ら。う。ら。う。ら。う。ら。う。ら。う。ら。う。ら。う。ら。う。ら。う。ら。  
只。こ。う。と。う。ら。う。ら。う。ら。う。ら。う。ら。う。ら。う。ら。う。ら。う。ら。う。ら。う。ら。

且て女房の縁切はまゝのこゝろひらき入すをあら  
 微塵すともあつていけむらゝ大方何もうもふ公の  
 ともいふはあまをいへて知つぬる居させまらうが  
 連合時をいふとすのふ本妻とす  
 まるも照さぬのあ子まゝの姉子のあうめとす  
 山名をいふとて居させし其名をいふ  
 浦里とす時をいふの母をいふ時をいふ  
 が三の年死なせしからしものふも里の



新編の巻三

四



通。いまも何の世異れもさしづゝの返りしはひ  
 の金返も父の隠へ都合してゆらゝんすやど  
 粹る母さしてまじとすも我身の昔よあひくら  
 内ハ有らうもらう人のさあんしつ返つて今で先  
 う。悪棍のさへこのされ筋の悪の金どつて  
 とやら時次郎さるのち後立私もあつ時へさう  
 放持もさくまのうまじと終る後園の夏とまじ  
 この故の今でけけさよあ捨よくらすも天道さるの

内惠のさうあつとて流先見ずの夏とても。それ  
 とまじさうと捨あつこの時へ春日屋の家へ  
 夏あさどこの世回のみまのさぬぬ是非とす一度  
 勘當さくせね。さうさう親父さる入すまうぬと  
 ちりやるも更の無理でさうひまどすも里さるぬ  
 日でも時とぬさる勘當さるての草あさの蓬の  
 さるへ無理のまぬと毎日毎夜の血ま婦いさうひ  
 もこまじ私さ不束ゆゑ時とぬさるの血氣よ入て居る





お母さんくつし思ふよ。お母さん〜とけいひん。お母さん〜  
 直ぐに直ぐの事せぬ多々の人の交會して知女の事  
 の直ぐの事や何ぞ下の思案の事〜とけいひん。お母さん〜  
 お母さん〜の事〜の事〜の事〜の事〜の事〜  
 中下は孫で首を志す直ぐの事〜の事〜の事〜  
 お母さん〜の事〜の事〜の事〜の事〜の事〜  
 里が思ひがちな〜女子氣の何〜の事〜の事〜  
 かねてある〜の事〜の事〜の事〜の事〜の事〜

お母さん〜の事〜の事〜の事〜の事〜の事〜  
 お母さん〜の事〜の事〜の事〜の事〜の事〜  
 たが互の事〜の事〜の事〜の事〜の事〜  
 かねてある〜の事〜の事〜の事〜の事〜の事〜  
 お母さん〜の事〜の事〜の事〜の事〜の事〜  
 めが味〜の事〜の事〜の事〜の事〜の事〜  
 すまじ〜の事〜の事〜の事〜の事〜の事〜  
 昔〜の事〜の事〜の事〜の事〜の事〜  
 ある〜の事〜の事〜の事〜の事〜の事〜





さぬとておしるやぬのよのよ  
 けしき終り二人と時をゆ  
 さぬと大直りふけるよあよ  
 今爰て其うこめとあててご  
 さえせし浦里「そのや  
 ちろちろ願ふてもうの幸  
 てあきりいす。コサ浦松さん  
 ちろちろと来ておんさん



浦里「新造浦松うけ奉り  
 浦里「うんやあきりのよすへトお  
 浦里「サカちろちろとあぬ  
 何であらふのあやうとあま入  
 多姉さぬこと「姉であき  
 さいすうらその五戸らあら  
 さぬかたをいぬえ「あつ  
 ねとそふ言ひるえすうあぬ

姉<sup>あね</sup>「うろこもせよ程<sup>ほど</sup>。かきさらす是<sup>こゝ</sup>から仲<sup>なつ</sup>ふふして去<sup>さ</sup>る  
 結<sup>むす</sup>のお後<sup>あと</sup>あのでせえろ。松<sup>まつ</sup>がてのんでトおつと干<sup>か</sup>す  
 浦<sup>うら</sup>里<sup>り</sup>「さむが盃<sup>さかづき</sup>とあびて 浦<sup>うら</sup>「まじら本<sup>ほん</sup>の妹<sup>あね</sup>と思<sup>おも</sup>ひ  
 ろえしとゆふのによらさ。互<sup>たがひ</sup>「まじら合<sup>あ</sup>つておえんは  
 ト睡<sup>ね</sup>まうしく酒<sup>さけ</sup>のみりしとて居<sup>ゐ</sup>る。折<sup>あ</sup>らま入<sup>い</sup>人の  
 文<sup>ぶん</sup>を六<sup>むつ</sup>何<sup>なに</sup>公<sup>こう</sup>うく浦<sup>うら</sup>里<sup>り</sup>が部<sup>べ</sup>屋<sup>や</sup>の短<sup>たん</sup>入<sup>い</sup>り来<sup>き</sup>りし障<sup>せう</sup>子<sup>こ</sup>  
 うろろ入<sup>い</sup>影<sup>かげ</sup>の後<sup>あと</sup>六<sup>むつ</sup>の息<sup>いき</sup>と短<sup>たん</sup>入<sup>い</sup>り互<sup>たがひ</sup>「うろこあふ光<sup>あかり</sup>  
 景<sup>かげ</sup>六<sup>むつ</sup>の答<sup>こたへ</sup>と入<sup>い</sup>あれふぞ文<sup>ぶん</sup>藏<sup>ざう</sup>入<sup>い</sup>るる悔<sup>い</sup>じ「あハ

最<sup>さい</sup>前<sup>ぜん</sup>本<sup>ほん</sup>ら且<sup>かつ</sup>下<sup>げ</sup>女<sup>に</sup>との浦<sup>うら</sup>里<sup>り</sup>が并<sup>なら</sup>びくうろ  
 ろく。彼<sup>か</sup>の春<sup>はる</sup>日<sup>ひ</sup>屋<sup>や</sup>時<sup>とき</sup>々<sup>々</sup>どのとまへんの内<sup>うち</sup>あつろく。  
 先<sup>さき</sup>刻<sup>とき</sup>「新<sup>しん</sup>造<sup>ぞう</sup>浦<sup>うら</sup>まろが物<sup>もの</sup>終<sup>は</sup>つと一<sup>いっ</sup>が今<sup>いま</sup>入<sup>い</sup>る酒<sup>さけ</sup>を  
 かき二<sup>ふた</sup>入<sup>い</sup>ろく。余<sup>あま</sup>会<sup>あ</sup>つろふも且<sup>かつ</sup>もろ怪<sup>あや</sup>氣<sup>き</sup>  
 の角<sup>かく</sup>つまはらうろ。やとと魚<sup>うま</sup>は松<sup>まつ</sup>原<sup>はら</sup>の目<sup>め</sup>前<sup>ぜん</sup>食<sup>た</sup>べ  
 ア「あつとさる。いと怒<sup>おこ</sup>ろしき嫉<sup>あや</sup>妬<sup>ま</sup>の一<sup>いっ</sup>会<sup>あ</sup>外<sup>あ</sup>面<sup>めん</sup>女<sup>に</sup>并<sup>なら</sup>内<sup>うち</sup>公<sup>こう</sup>  
 女<sup>に</sup>夜<sup>よ</sup>母<sup>はは</sup>と仏<sup>ぶつ</sup>の娘<sup>むすめ</sup>ひるす理<sup>ことわり</sup>ハテ争<sup>あ</sup>まは氏<sup>うぢ</sup>場<sup>ば</sup>の  
 光<sup>あかり</sup>宗<sup>むね</sup>子<sup>こ</sup>細<sup>こ</sup>ぞあらんとうろ。内<sup>うち</sup>かろく。一<sup>いっ</sup>間<sup>ま</sup>の内<sup>うち</sup>も

年のとあるき一人の客障子と細目一かきあひくとの  
 体とどろくこころうごひ接るひまもち客ハテも思ひあはる二  
 人のよすすのやとます千葉家へ仇する鐘が例のおせ  
 とやんが執念くもこまのゆてのあもるやトゆん  
 波で文義がふのむく拍子にま切る障子こころの怒  
 の障子ようつる影もあこころ消るせとまらふゆ  
 なる袂指の音カランく火の用心さるゝあらしよも  
 二階まららるゝあらしよもまららるゝコト

身六回

それゆゑ五條の勞七情の替するにようてうすま  
 妻張紅圍よまららるゝ時まぬが傍よか  
 浦里ののるゝ妻やえんをらんあせらるゝとあはるゝ  
 あそ周章てまきりよあそとやが浦里はく目と覚  
 浦「そんから今ののあそであはるゝの」時「うんぞ  
 とこのあそやまららるゝ浦「ナイアハね」の  
 んの名は何とさうしね時「コレヤア」のとき

...

捧よまきが内の女房の名もきよとていせしほしき人  
 ありて居るトやア秘入の浦「アノまきとていせし  
 けね時「そまよとていせしきやー」浦「アモのね今その  
 おひろも入がにせし〜ん〜」を呼ん〜てかねとせうんを  
 足まきよとの盆よまきの〜いよよよ〜」時「ハテスルよま  
 みる夏もあつものいよ。ま〜思ひよよまきよ〜ん〜とよ  
 から日頃つら〜前がも内へまきよ〜ん〜がまよ〜ん〜のま思  
 つ〜のから。そまよとていせしよまよ〜ん〜の〜でまよ〜ん〜

小も氣よかける夏にね入と〜と〜と〜の容よの女〜「ア  
 色の白い老人せうらるまよ〜いお方でもまよ〜の〜と〜  
 てアノ山紋縮緬よ花菱の紋の付〜し物よまよ〜と知  
 ろん〜」時「ハテラう〜と〜まよ〜もあつもの〜じよ〜ん〜とアノ  
 お光が小紋縮緬よ花菱の紋の付〜る着物よ持〜て  
 るよ〜と〜あつら〜て〜まよ〜の〜もよ〜と〜まよ〜の〜まよ〜と〜  
 ぶ〜と〜い〜し〜まよ〜と〜まよ〜の〜まよ〜と〜成〜い〜まよ〜と〜  
 今夜アあら〜まよ〜の〜か〜ら〜う〜よ。浦「まよ〜と〜と〜まよ〜と〜





も知れぬいふなりをたてて不し折ぐら十形をうりまをるる事  
 破る後青の髪をもつ國の陰火の人出でふいふくくと  
 先よひちやくのぞと時をたひとあやし死なうまひの  
 とりふも華と道あるふよまづ。なるともううよ我々の  
 門口で来るといふ思ふやかの陰火忽庭口の垣の  
 破まると入るといふ一が忽消うせけまがさても何や  
 志死するをと思ふと経ぬけまが例のぞく庭の切  
 戸とわらくとおづづるに女房お光がわがのを推す

てまをうり入るといふ入るも何れぬ時をたがすま  
 の顔よふ審としておまひりよつる早あかへのつりもの  
 真一六まのつら。お留守の晩ら床もとらす巨捷よそ  
 まとらういふ窓のまうとくんとる夢の中鳴りあやしの  
 山名おと申入尋ねて往て浦里まよお目にかつと  
 日しーがんとお思ふまどりのあてらよ新し合見受らるの  
 不盡て別まそかひつる道すづら。おきまどをまへつらめづり合  
 する平は連ま房ついと思ふいひびが表のかし。おあす

その音がうらうらと耳へ入ると目が覚めて今頃うらうらと死  
動を感ぜんとおぼえぬらぬ下 語らぬ時夜とてい  
お光が魂の遙く廊へ迷ひゆた彼浦里より入て  
我と二人が仲よき死。とまのまうまうと堤下で我々の  
あつりえたる陰の穴のくくろのつら魂のまを真実を  
ぬのびし。いよおそろし女の一念死すうら鬼  
ともうらむこと公の肉はあつるとま。とまこととま  
体よのてら。時イヤちと今宵ハひさうのゆ多返つこ

のや。サ。早。床。と。取。つ。や。モ。明。る。の。は。間。も。あ。ま。の  
ど。や。と。り。く。と。一。下。寐。入。ト。ロ。を。か。ら。い。と。ひ。ま。の。光。が  
嬢。の。一。念。の。い。と。ち。と。ろ。し。ま。は。ま。を。相。つ。ま。う。ら。ま。の  
内。は。居。る。夜。の。み。く。夜。毎。日。毎。は。浦。里。が。え。へ。う。ら。ひ  
け。ま。が。お。光。の。い。ま。く。と。は。い。と。と。若。く。病。も。終。り  
病。の。床。の。ま。ゆ。り。か。折。ぐ。の。物。が。う。ら。う。ら。く。さ。ぬ。く  
の。ま。と。ら。む。と。の。ま。あ。つ。後。の。志。の。り。か。か。あ。ら。う  
ち。死。の。通。は。し。浦。里。も。又。廊。は。あ。つ。と。病。の。ま

浦里の通

病のま

けろをくふ國をあらう。けろを  
 浦里が病のこよ煙一まふ。  
 折く後の中になぞのうて自  
 分のこよ罵うてまをゆる  
 けとを恨み。又心を掛くを。  
 その病よ志くからず強面うり  
 志も糸由縁あり時々助か  
 胸間はまけのりて。おのひを



暗くすうと或は光がまの  
 下くまうと年をけり女子の  
 かくあるひのり或はうとわ。  
 其まいとわうげよ波入と  
 のけもよとらとあせろしく  
 おがけける時とては夜  
 段内よ安ゆり時ハ浦里を  
 なくは夜とて眠るかど



浦里の病

その怪一も二つかきつるけしむが普く社社公閣のか持  
 祈禱のいふまじらるる医療のよつとくともども  
 ともある一ふつりりる愛一は程遠近をありたて病ひ  
 ある人といふ時ハ甚とおもひまじらるる  
 一は廿四丈とかきつりといへども余をむまがく手首首の  
 人の家といふともども一かゝるまじらるる  
 人々のともども一は速いといつて治療をむこつ  
 一箇の社医あり年の齡ハ六十あるといふ西ほど

又童のともども其すこやむといへ今日といふありつる  
 あゝ外の呼べしつる何呼べしつるいふまじらるる  
 其ともども一は都野人病の家まかゝるらるる  
 彼の神人のいふを待てれと名あかして是は治療を  
 求るよ其根えとよまじらるる  
 志つるともども一は其まじらるる  
 我家の掃痰病と名ふ浦里が物り病の病よ世も病  
 ろる難病とよまじらるる折ららるるまじらるる

こちに入らん  
 馬にば五三日其病愈と云らるる其期に靡べり  
 け入るなりやと云ふ。しるがらく春へ走り出まの  
 由どつひて治癒となす。此後六文を細と云ふり  
 たりもありやと云ふ。其の浦里と云らるる我すこ一の園に  
 ありて然るを其病を治せんとす。其病を治せん人  
 の後由らばありと云ふ。昔唐すこ一と云ふ病  
 るものありと云ふ。こちみ一譜の某名と云ふ。ゆー

藍と雷丸ふりまき  
 もして藍と雷丸と用ひて其病治すと云ふ。唐すこの文あり  
 たり。其の浦里と云ふ。其病を治せんとす。其病を治せん人  
 の後由らばありと云ふ。昔唐すこ一と云ふ病  
 るものありと云ふ。こちみ一譜の某名と云ふ。ゆー

寤覚録言卷之三十一

作者 南仙笑楚滿人

畫工 溪齋英泉

東都書店  
西村屋與八  
丁子屋平兵衛  
越前屋長次郎

秘傳 志願丸 九功能書 小半判入 代百二十四銅

第一かきものいりまをみむくみはる長志の...  
いびきれしていひまがてむねまう...  
のどを氣を存するゆへに...  
かきまうせしむらひ...  
お身自のめりけり...  
たらしめりむねのうえむね...  
志願丸...  
月あま...  
あふた...  
さん...  
男...  
気...  
付...

先此録書... 我々の病に... 古今... 江戸... 本家 江戸兩國横山町二百大坂屋平藏

取 江戸... 本家 江戸兩國横山町二百大坂屋平藏

次 江戸... 本家 江戸兩國横山町二百大坂屋平藏

尼子九牛七國士傳近刻

為永春水著 隼 線西画

歌舞 妓織

系如志々巻

三編 業亭行成作 近刻 貞齋泉晁画

滑替和合人

二編 滝亭鯉文作 三編 近刻

和漢軍書... 江戸... 本家...

書林

江戸小傳馬町三丁目

文溪堂 丁子屋平兵衛

